

# 中央学院大学 人間・自然論叢

第 23 号

---

## 目 次

### [論 文]

陸上競技長距離選手の筋力特性について

——体幹筋力と競技能力の関連性—— .....川崎 勇二 … 3

トワルドウスキの相対主義批判 .....佐藤 英明 … 17

### [翻 訳]

ジャック・アタリ著

『ユダヤ人，世界とお金』(4) .....鈴木 正昭 … 41

### [研究ノート]

スポーツ指導者養成プログラムにおける構造と要素

——国際陸上競技連盟コーチ教育認証制度のカリキュラム試案——

.....小林 敬和 … 83  
孫 南

### [論 文]

北魏体に投影した石刻文字を探る

——「龍門四品」を中心として—— .....中田 正心 … (1)

---

中央学院大学商学部・法学部

2006(平成18)年 6 月



# トワルドウスキの相対主義批判

佐 藤 英 明

- 〈目 次〉
1. はじめに
  2. トワルドウスキの志向性理論
  3. トワルドウスキの判断論と真理論
  4. 相対的真理に対する批判
  5. 認識論的主観主義に対する批判
  6. タルスキの真理論との関連

## 1. はじめに

トワルドウスキは、その著『表象の内容と対象の理論 (*Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen*)』(1894年)においてブレンターノの「志向性」概念を基礎として心的現象の解明をおこない、そこに作用・内容・対象の区別を導入したことで知られている。フッサールは、この著作を批判的に継承し、トワルドウスキの「内容」概念に含まれる「像」という契機を「意味」として捉えなおすことで、現象学の形成の基礎を築いた。また、マイノングは、トワルドウスキが示した「対象」概念をさらに拡大することによって対象論を構想するにいたったとされる。さらに、心的現象に関するトワルドウスキの言語分析的手法は、分析哲学の先駆と見なされることもある。

このようにトワルドウスキの議論は、現象学、対象論、分析哲学などの源流に位置づけられるが、そのため逆に、すでに乗り越えられたものと見なされることも多く、その独自性に注目されることは稀である。だが、トワルドウスキの分析には、着目すべき多くの論点が含まれている。本稿では、特に真理論の分野におけるトワルドウスキの議論を考察し、現代の真理論との関連を明らかにしたい。

## 2. トワルドウスキの志向性理論

トワルドウスキは、1866年10月20日ウィーンに生まれた。1885年から89年までウィーン大学のブレンターノのもとで哲学を学び、1892年には『理念と知覚：デカルトの認識論的研究 (*Idee und Perzeption. Eine erkenntnistheoretische Studie aus Descartes*)』(出版は1891年)によって学位を得た。学生時代からウィーン哲学協会の組織化に尽力し、自ら2年間副会長もつとめている。1894年には研究論文『表象の内容と対象の理論』によってウィーン大



学で教授資格を得て、95年までウィーン大学で私講師をつとめた後、ポーランドのルヴフ大学に哲学教授として招かれた。<sup>(1)</sup>

当時、ルヴフ大学には哲学の講座はなく図書館にも十分な資料はなかった。トワルドウスキは、まったく何もないところから講座を開設し、ルヴフ大学だけでなくポーランドの哲学教育全体の組織化をすすめた。1904年には、ポーランド哲学協会を設立。1911年には季刊誌「哲学運動 (*Ruch Filozoficzny*)」を創刊し、自らも編集にたずさわった。ルヴフ大学では多くの弟子たちを輩出したが、彼らを中心に結成されたのが、ルヴフ-ワルシャワ学派 (ポーランド学派) である。ルヴフ大学とワルシャワ大学を拠点としたこの学派は、論理学者、哲学者、数学者らによって組織され、特に第一次世界大戦から第二次世界大戦までの間、ポーランドの独立と発展を文化的側面から支援する運動を展開した。トワルドウスキは、この学派の事実上の創始者となったのである。当時のポーランドの歴史的状況のなかで社会的責任を果たそうとしたトワルドウスキの強い使命感が、彼を教育活動や文化活動に専心させたといわれている。

トワルドウスキは、心的現象の分析についてはブレンターノの「志向性」概念を基礎として、そこに作用・内容・対象の区別を導入した。この区別は「名辞」の三つの機能に対応するものとして説明される。名辞は、第一に話し手が何かを表象していること (表象作用) を告知し、第二に名辞の意味である話し手の心的内容を聞き手のうちに呼び起こし、第三にこの意味によって対象を名指す。この三つの機能に対応して、表象に関して、作用・内容・対象という区別がなされる (Twardowski, 1894, S. 11)。作用の対象と内容との違いは、風景と絵画との違いによって説明される。「描かれた風景」という表現は、風景画が表現している風景そのものを指示するために使用することもできるが、風景画を指示するのにも使用できる。「描かれた風景」が「風景そのもの」すなわち「真の風景」を指示する場合には、「描かれた」という語は、その風景が或る絵画に対して一定の関係にあることを示している。この場合、「描かれた」という語は風景を限定するものとして「規定的」

に使用されている。それに対し「描かれた風景」という表現が風景画を指示する場合には、「風景」という語は「風景そのもの」ではなく描かれた「画布面」を指し、「描かれた」という語は「風景」という語の意味を変化させるものとして「変容的」に使用される (Twardowski, 1894, §4)。

「描く」という語のこうした二義性は「表象」にも当てはまり、「表象する」という語には二重の客観が対応するとされる。表象には、表象を「通して」表象される第一次客観としての「対象」と、表象の「なかで」表象される第二次客観としての「内容」という、二重の客観が対応すると考えられ、内容は対象の「精神的写像」であるとされる。「表象された対象」という表現が第一次客観である「対象」を指示する場合には、「表象された」という語は「規定的」に使用されており、その対象が「表象能力を有するものに対して或る一定の関係にあること」を示している。この場合、「対象」という語の意味は何ら変容されることはなく、この語は「真の対象」を意味するものとして使用される。他方、「表象された対象」が第二次客観としての「内容」を指示するものとして使用される際には、「表象された」という語は「対象」の意味を変容するものとなる (Twardowski, 1894, §4)。

対象は、その存在・非存在にかかわらず、表象され、名辞によって名指される。しかし、トワルドウスキは、本当は存在せずただ表象されるだけの対象に関して、それは「表象対象」として存在すると主張したり、「志向的存在」といった新たな「存在」を導入したりはしない。かりに「現象的志向的存在」を「現実的存在」に対置するにしても、それはたんに「表象されているだけで存在しない」ということと同義である。トワルドウスキは、「存在と非存在の境界」を「可能なかぎり厳密に明確化」しようとする (Twardowski, 1894, S. 25)。存在と非存在を明確に区別しようとする背景には、次節で見るように、すべての判断を存在判断と見なし、肯定判断の真理を対象の存在によって定義しようとするトワルドウスキの真理観がある。

「存在」概念を二重化したり拡大したりすることなく、存在しない対象の表象を容認するトワルドウスキの議論からは、一つの重要な帰結が導き出さ

れる。それは、心的作用とその対象との関係の特殊性である。心的作用によって、存在しない対象が表象される場合、この表象作用は存在するが、対象は存在しない。したがって、両者の関係は、存在するものと存在しないものとの関係ということになる。トワルドウスキは、「関係項の一方が存在し他方が存在しないような種類の関係」を認めるのである（Twardowski, 1894, S. 27）。この主張は、トワルドウスキの判断論および真理論において、きわめて大きな意味をもつことになる。

### 3. トワルドウスキの判断論と真理論

真理に関する理論としては、真理を「信念体系の内的整合性（無矛盾性）」であるとする整合説、「人々の合理的合意」であるとする合意説、「目的達成のための有用性」であるとするプラグマティズムの真理観、あるいは真理は消去可能な「余剰」であるとする余剰説など、さまざまな理論がある。だが、最も古典的であり常識的な真理観にも近いのは「対応説」である。アリストテレスは、これを次のように定式化している。

「存在するものを存在しないと言い、あるいは存在しないものを存在すると言うは偽であり、存在するものを存在すると言い、存在しないものを存在しないと言うは真である」（『形而上学』1011b26-27）。

さらに、アリストテレスによれば、真偽は、事物ではなく判断のうちにあらが、その基礎は存在のうちにある。

「君が白くあるのは、われわれが君は白くあると真に思うがゆえにではなくて、かえって君の白くあることのゆえに、このことを主張するわれわれは真を語っているのである」（『形而上学』1051b9-10）。

ブレンターノの「判断」に関する議論は、このようなアリストテレス的対応説に忠実なものである。ブレンターノによると、すべての判断は存在判断である。判断における対象への関係は、対象が存在すると認める、もしくは認めないという関係である。判断作用は、表象された対象について、それが

存在する、あるいは存在しないと主張するものであるとされている。したがって、肯定判断の真理は、対応する対象が存在することを意味する。<sup>(2)</sup>

ブレンターノの判断理論を継承したトワルドウスキにとって、判断の対象は表象の対象と同一であり、判断とは、その対象の承認もしくは否認である。「ソクラテスは人間である」という判断の対象は、〈ソクラテスは人間である〉という事態や命題などではない。この判断は、ソクラテスを人間として表象する場合と同様に、〈人間であるソクラテス〉を対象とし、その存在を承認するのである。「 $A > B$ 」という判断の対象は、〈 $A$ 〉と〈 $B$ 〉との間の大小関係であり、この判断は、この関係の存在の承認と見なされる。同様に、「丸い四角は存在しない」という判断の対象は、〈丸い四角は存在しない〉という事態ではなく、〈丸い四角〉である。この判断は、〈丸い四角〉の存在の否認と見なされ、この判断の対象は、あくまでも〈丸い四角〉であるとされる。つまり、下された判断は、命題のかたちで表現されるが、判断作用の対象は、理念的な命題や事態とは見なされないのである。

トワルドウスキは、表象と同じように、判断についても内容と対象の区別が成立するという (Twardowski, 1894, §2)。上述のように、判断の場合も表象の場合も対象は同じである。だが、表象の内容が一種の写像と見なされるのに対し、判断の内容は、判断において承認されたり否認されたりする対象の存在であるとされる。「本来的な意味において、判断されるのは対象そのものである。そして、対象が判断されるときには、別な意味においてではあるが、その存在もまた判断されるのである」 (Twardowski, 1894, S. 9)。規定的な意味において「表象される」のが対象そのものであり、変容的な意味において「表象される」のがその写像としての内容であるように、規定的な意味で「判断される」のは対象そのものであり、変容的な意味で判断されるのはその存在であるということになる。このように判断の対象から、その存在を判断内容として分離するところに、トワルドウスキの判断理論の独自性を見いだすことができる。

この判断理論は、ブレンターノに忠実なものではあるが、フッサール、マ

イノング、ラッセルなどの理論と比較すると、かなり特殊なものであるという印象を受ける。その理由は、判断の対象の捉え方の違いにある。たとえば、フッサールにとって「ソクラテスは人間である」という判断の対象は、〈ソクラテスが人間である〉ということ（事態）であって、判断の主語となる〈ソクラテス〉という人物ではない（Husserl, 1913, §94）。ラッセルやマイノングの場合も同様であり、ラッセルは、それを「命題（proposition）」と呼び、マイノングは「客体的なるもの（Objektiv）」と呼ぶ。判断の対象は、独特な理念的対象と考えられているのである。

ところが、判断の対象を判断される事態や命題のような理念的対象と見なすと、問題が生じてくる。例えば、「 $A=B$ 」という判断の対象が〈 $A=B$ 〉という事態であるとする、判断が正しい場合には、この事態が存在（存立）し、誤っている場合には、この事態が存在（存立）していないと考えられる。そして、〈 $A=B$ 〉という事態と〈 $A$ 〉という対象との関係は、全体と部分の関係である。判断が正しい場合、存立する事態の部分である対象もまた存在すると考えられる。ところが、「丸い四角は存在しない」という判断の場合には、事情が異なる。〈丸い四角は存在しない〉という事態は存立するが、その部分である〈丸い四角〉は存在しないからである。この場合、存在する全体と存在しない部分との関係を認めねばならないことになる。逆に、「 $A=B$ 」という判断が誤っているときには、〈 $A=B$ 〉という事態は存立しないが、その部分である〈 $A$ 〉という対象は存在する。この場合には、部分は存在するが、全体は存在しないということになるが、同時に、判断作用と判断される事態との関係も、存在するものとししないものとの関係ということになる。

これは、特にラッセルにとって重大な問題であった。トワルドウスキとは対照的に、ラッセルは、関係項の一方が存在しないような関係をいっさい認めない。指示するもの（言語）と指示されるもの（対象）との関係に関しても、判断（作用）と判断されること（命題）との関係に関しても、関係項の一方が存在しないということは認められない。だが、存在する心的作用と存

在しない対象との間に何の関係も成り立たないとすれば、対象が存在しない場合「表象や判断は、完全に対象を欠いているか、偽なる命題も、真なる命題と同じように存立するかのいずれかである」(Russell, 1904, p. 510) ということになる。ここで、命題 (proposition) と呼ばれているのは、言語的表現ではなく、判断作用によって判断されることがらである。誤った判断が、判断されたことがら (命題) をまったく欠いているとすれば、それは何も判断していないことになるし、誤った信念は、何も信じていないことになってしまう。それゆえ、ラッセルは、偽なる命題も、真なる命題同様に存立すると主張する。つまり、誤った判断の対象である反事実的な事態も存立するというのである。事実も非事実も同じように存在しなければならないというわけである。

「存在 (being) は、考えられるどのような項 (term) にも、また、思考の対象となりうるものにも属する。端的に言って、存在は、真であろうが偽であろうが、そもそも命題中に出現できるすべてのものに、また、こうした命題すべてに属する」(Russell, 1903, sec. 427)。

これによれば、〈丸い四角は存在する〉という命題も〈丸い四角は存在しない〉という命題も、ともに存在を有し、そして、〈丸い四角〉という対象も存在を有することになる。

ところが、ラッセルは1905年の「指示について」で、記述理論を提示し、〈丸い四角〉という対象が、〈丸い四角は存在しない〉という命題の部分であることを否定する (Russell, 1905)。それによって、〈丸い四角〉のような対象を認める必要はなくなり、したがって、その存在を認める必要もなくなったのである。たしかに、これで、実在しないものに何らかの存在を認めることは避けられるかのようにも思われる。だが、事実と反する命題に関しては、関係項の一方が存在しない関係を認めない限り、ラッセルはなお、その存在を認めなければならないのである。偽なる命題が存在しないとすれば、偽なる命題を信じることはできなくなるからである。

トワルドウスキは、関係項の一方が存在し他方が存在しないような種類の



関係を認めた。そして、判断の対象を判断に対応する理念的对象とはせず、判断の対象から存在を切り離そうとした。これは、たんにブレンターノの理論に忠実であったというだけではなく、存在に関する以上のような問題を回避するための手法でもあったと考えることができる。

#### 4. 相対的真理に対する批判

トワルドウスキは、判断理論に関してブレンターノと同じ立場をとるが、判断の真偽の変化をめぐるでは対立することになる。ブレンターノとトワルドウスキは、ともに実在性 (Realität) と存在 (Existenz) とは区別すべきだと考えている。トワルドウスキは「対象の実在性が何によって構成されるかは言語的には記述できないが、鋭い音、樹木、悲しみ、運動のような対象を実在的なものとし、不足、不在、可能性<sup>14</sup>のような対象を実在的ではない対象に含めることは、おそらく今日では大多数の人の意見が一致するところであろう」(Twardowski, 1894, S. 36) と述べている。実在的对象である樹木が存在したりしなかったりするのと同様に、金銭の不足という非実在的な対象も存在したりしなかったりする。

実在的なものは変化する。さっきまで聞こえていた音が聞こえなくなったり、運動していた物体が停止したりする。それによって存在していた音や運動は存在しなくなる。実在的ではない対象も、実在的对象の変化によって間接的に変化する。金銭の受け渡しによって、金銭の不足は解消され存在しなくなる。ブレンターノは、こうした対象の変化にともなって、判断の真偽も変化すると考えている。「鋭い音が鳴っている」という判断は変わらなくても、音が聞こえなくなれば、この判断は偽となる。真理是不変なものではないというわけである。このようにブレンターノの議論からは、相対的真理の存在が帰結する。だが、こうした主張はトワルドウスキには受け入れられるものではなかった。

トワルドウスキは、1900年に発表した論文「いわゆる相対的真理について

(O tzw. prawdach względnych<sup>(3)</sup>)」において、相対的真理が存在するかのよう  
な主張を徹底して退けようとしている。相対的真理とは、「どこでもつねに  
真であるのではなく、一定の状況においてのみ真であるような判断」  
(Twardowski, 1902, S. 416) のことである。相対的真理の存在を主張する相  
対論者は、相対的真理という特性をもつ判断の例をあげて、自説を擁護しよ  
うとするが、トワルドウスキは、そうした判断が相対的真理とはいえないこ  
とを具体的に論じている。

相対的真理が存在するといえるためには、一定の状況の下では真であるが  
他の状況の下では偽となるような判断が存在することが示されなければならない。  
トワルドウスキによれば、それは次の二つの条件を満たすような判断  
でなければならない (Twardowski, 1902, S. 417)。

- (1) 状況の変化にともなって真ではなくなったという点でのみ変化し、  
それ以外の点ではまったく変わることはない判断であること。
- (2) 一定の状況の下で一度は真であったことがあり、状況の変化にとも  
なって初めて偽となった判断であること。

しかし、相対論者があげる例は、これらの条件を満たしてはいない。そうし  
た事例が、一見、相対的真理の存在を支持するかのように見えるのは、心的  
活動としての判断 (Urteil) と判断を言語的に表現した言明 (enuntiatio) や  
文 (Satz) との違いが無視されているためである。言明の表現形態が表面上  
は同じであったとしても、それによって表現されている判断が同一であると  
は限らない。それは、日常言語の多義性と省略的表現方法のためである  
(Twardowski, 1902, SS. 417-425)。

たとえば、現に雨が降っている状況において「雨が降っている」と言明す  
れば、真なる判断が言明されたことになるが、雨がやんでから同じ発言をす  
れば、偽なる判断が言明されることになる。相対論者によれば、これは、状  
況の変化にともなって、判断が真から偽に変化したのであり、この判断は相  
対的に真であるにすぎないということになる。

だが、「雨が降っている」という言明は、時間と場所が省略された表現に



すぎず、実際の判断は具体的な時間と場所を規定された現象に関するものである。とはいえ、「今ここに雨が降っている」といった表現で時間と場所を示そうとしても、「今」「ここ」という語の多義性のために、問題は解消されない。これらの言葉を他の言葉に置き換えて、その多義性を取り除かなければならない。たとえば「グレゴール暦による1900年3月1日、中央ヨーロッパ時による正午にレンベルク城の山の上およびその周囲に雨が降っている」と表現すれば、レンベルク城の山の上にいる人がその時「雨が降っている」と言明した判断と同じ判断を表しているといえる。しかし、雨がやんでから同じ発言をしても、それは同一の判断の言明とはいえない。

したがって、このような例では、同じ言葉を含む同じ言明であっても、それによって意味されている判断は異なっており、条件（1）を満たしてはいない。「グレゴール暦による1900年3月1日、中央ヨーロッパ時による正午にレンベルク城の山の上およびその周囲に雨が降っている」と表現される判断は、いつどこで誰が判断したとしても真であって偽となることはない。この判断は「現実と一致して」おり、判断が同一であるかぎり、一致しなくなることはない。

相対論者のあげる例には、条件（2）を満たしていないものもある。たとえば、「冷水浴は健康によい」といった判断について、冷水浴は状況によって健康によい場合も悪い場合もあるという理由から、相対論者は、これが相対的真理であると主張する。しかし、「冷水浴は健康によい」という文については、二通りの解釈が可能である。第一に「あらゆる冷水浴はつねに健康によい」という普遍判断を表すと考えることができる。第二に「冷水浴は通常は健康によい」という特殊判断を表すと考えることもできる。普遍判断と解釈すれば、これは明らかに偽であり、これまで一度たりとも真であったということはない。したがって、条件（2）を満たしてはいない。特殊判断と解釈すれば、冷水浴に一定の効果が認められる以上、それは真であり、それが偽になるということはない。「冷水浴は健康によい」という判断は、普遍判断であるにせよ特殊判断であるにせよ、相対的真理の例とはなりえないの

である (Twardowski, 1902, SS. 425-429)。

トワルドウスキは、倫理原則に関する相対性もこれと同様に表現上のものにすぎないと主張する。「自らの信念に反することを語るのは許されない」といった判断について、例外がありうることを根拠として、これが相対的真理であるというのは誤りである。普遍判断としては、この判断は明らかに偽であり、真であるとすれば、それは「通常は自らの信念に反することを語るのは許されない」という特殊判断だからである。

相対論者は、ある時代にある社会においてのみ遵守の義務があるとされるような倫理原則の存在を倫理原則の相対性の根拠とするが、これも誤りである。そうした原則は、その時代にその社会において遵守の義務があると見なされたはずであるが、そう見なされたことは正当であるか不当であるかのいずれかである。不当にも遵守の義務があるとされたのだとすれば、この倫理原則は何らの真理をも含むものではない。遵守の義務が正当であったとすれば、それはその時代のその社会の生活条件においてその倫理原則を義務とすることが正当であるということである。生活条件が変化すれば、その原則が義務ではなくなるが、それは、この原則が真ではなくなるからではなく、適用されるべき生活条件の下に生きるものが誰もいなくなったからである。この原則が非真理になったのではなく、原則そのものは真ではあるが、原則が適用される対象が存在しなくなったということである。適用すべき生活条件が招来すれば、この原則はそこに生きる対象者の義務となるのである (Twardowski, 1902, SS. 429-433)。

さらに、経験からの帰納によって導き出された自然科学の仮説や理論の蓋然性が、相対的真理を示すという主張に対しても反論がなされる。「地球は太陽の周囲をまわる」という言明は、確実な判断を表すかのような形をとってはいるが、論理的確実性を示しているわけではなく、蓋然的判断を表すにすぎない。それは、一定の知の状況においては、この判断は真であるが、研究の進歩や新たな発見によって偽となりうるということではない。この判断は、真であるか偽であるかのいずれかなのだが、われわれは、そのいずれで

あるかを知らないというだけである (Twardowski, 1902, SS. 433-434)。

以上のように、トワルドウスキは相対論者が例としてあげる判断が、相対的真理ではありえないことを示す。その際に用いられるのは言語分析の手法である。今日では、文の表面的な文法構造と対応する命題の内的論理構造とが異なるということは、分析哲学における常識となっている。トワルドウスキの分析は、このことを明らかにした先駆的な試みであるといえる。だが、そこにはあらゆる判断内容を何らかのかたちで一義的に表現することが可能であるとする素朴さが見られる。

ウィトゲンシュタインが主張したように、日常言語を用いて判断内容に対して精確な言語的表現を与えることは困難である。

「言語は思想に変装を施す。すなわち、衣装の外的形式から装われた思想の形式を推論することはできない」(Wittgenstein, 1922, 4.002)。

トワルドウスキの定式では、たしかに、命題という論理的概念ではなく、判断という心理的概念が用いられている。さらに彼の注意が向けられているのは、判断するという心理的作用と、その作用の存在論的相關者である。そのため、フレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタインとは違って、思想と表現が一致するような理想的もしくは人工的言語の形成には関心がない。ブレンターノの遺産を受け継いで、彼の関心は、心的な判断作用に含まれるものに向けられているのである。

## 5. 認識論的主観主義に対する批判

相対的真理の根拠とされるのは、以上のような判断の事例だけではない。相対主義は、特に認識論的主観主義の立場と密接に関わっている。主観主義の見解においては、「ある特定の判断はある特定の人にとってのみ真である」とされる。トワルドウスキは、このような主張は二重の意味をもつという (Twardowski, 1902, S. 436)。

第一に、このような判断が真であるという確信が不当なものであるとすれ

ば、「特定の人にとってのみ真である判断」とは、実は偽なる判断を意味することになり、特定の人のみが誤ってそれを真であると信じているにすぎないことになる。

第二に、この判断が真であるという確信が正当なものであるとすると、「特定の人にとってのみ真である判断」とは、特定の人以外には真であることを正当に確信できないような判断を意味する。この判断は真ではあるが、真であることを正当に確信することができるのは、特定の人のみであるということになる。

第一の意味であるとするれば、それは人が誤った判断を下すときに、しばしば見られることであるにすぎない。誤った判断とは、偽なる判断を不当にも真であると確信することだからである (Twardowski, 1902, S. 437)。

第二の意味であるとするれば、この判断は、特定の人以外はそれを真であるとする権利をもたないような判断であり、権利をもたない人が同一の判断を下しても、それは偽であるということになる。しかし、同一の判断が真でも偽でもあるというのは、矛盾律に反する。主観主義者が例としてあげるのは「この花はよい香りがする」といった判断である。この花の香りを好む者 A によって、この判断は正当に真であると確信され、同じ香りを不快と感じる者 B にとってはそれが非真理であるとされる。だが、この言明が省略的であることは明らかであり、これは同一の判断などではなく、「この花は A にはよい香りがする」「この花は B にはよい香りがする」という異なった判断が、同一の文によって表現されているにすぎない。それゆえ、前者は真であり、後者は偽なのである (Twardowski, 1902, SS. 438-439)。

主観主義者はまた、人間の心理的物理的な有機的組織の制約のために人間の判断は人間固有の理解に基づくものでしかなく、別の有機的組織を有する者は人間とは別の判断を下すことがありうるという種的相対主義を主張する。種的相対主義からは、人間が正当に真であると確信する判断が、人間以外の種にとっては偽でありうるということが帰結する。しかし、同一の判断が真であると同時に偽でもあるということは、明らかに矛盾律に反すること

になるから、矛盾律を破棄しないかぎり、種的相対主義は支持されえない。<sup>(4)</sup>

主観主義の理論によれば、人間は、外界がどのような状態になっているかについては一切判断できないのであり、ただ外界が人間にどのように現れるかについて判断しうるにすぎない。換言すれば、人間の判断は人間が表象する対象に関するものであって、人間から独立に存在する外界に関するものではない。トワルドウスキは、このような表象主義的見解を相対論者と共有している (Twardowski, 1902, S. 441)。それゆえ、人間によって表象された外界の性質が人間という有機体の組織に依存することや、外界についての判断が外界の表象の仕方に依存することは認めている。しかし、そこから外界に関する真理の相対性を導き出すことは誤りであるとしている。

トワルドウスキの議論は、次のようなものである。人間から独立に存在する原因  $R$  が、人間においては対象  $r$  の表象を呼び起こし、人間以外の有機体には対象  $r'$  の表象を呼び起こすとき、この対象について人間は  $r-p$  という判断を、人間以外は  $r'-p'$  という判断を下すことになる。しかし、それでも人間によってなされた判断は人間にとってのみ真であり他の有機体にとっては偽であるということにはならない。二つの判断は異なる判断であり、ともに真でありうる。しかし、表象対象である  $r$  や  $r'$  が原因  $R$  と同一視され混同されると、人間は  $R-p$  という判断を、人間以外は  $R-p'$  という判断を下していると考えられることになる。人間は表象を基礎とした徴表  $p$  を人間以外は徴表  $p'$  を対象に帰属させると考えると、人間によって真であるとされる判断  $R-p$  は、人間以外の有機体にとっては偽となる。だが、これは矛盾律と相容れないことになる。

相対論者の主張は原因  $R$  と表象対象との混同に基づく。人間の判断は、われわれの意識の外に存在するような原因  $R$  に関するものではなく、人間の表象において与えられている対象  $r$  に関するものであり、原因  $R$  は、人間においては徴表  $p$  をもつ対象  $r$  の表象を呼び起こし、人間以外には徴表  $p'$  をもつ対象  $r'$  の表象を呼び起こす。したがって、人間と人間以外の有機体は異なった判断を下しているのであって、同一の判断が、種によって真とな



ったり偽となったりするのではない (Twardowski, 1902, SS. 441-442)。

トワルドウスキは、表象主義的な見地から、表象対象とその原因となる外界とを区別することで、主観主義的相対主義を退ける。だが、種によって異なる表象対象の背後に想定される、すべての種に共通の外界の存在は、いかにして根拠づけられるのか。トワルドウスキの議論は、ここで表象主義の古典的な難問に遭遇することになる。

物理的存在のみを唯一の客観的実在と見なす物理主義的な立場をとることで、表象対象と外界の存在を区別することは可能である。われわれが知覚しているのは表象対象であり、表象の原因となる外界は、われわれが知覚しているような有様で存在しているのではなく、物理学的に記述されるようなものとして存在していると考えるのである。しかし、物理学的に記述される世界も、知覚的ではないにせよ、人間によって構成される世界であり、人間の表象世界であろう。表象主義を前提として物理主義的立場をとろうとすると、このような困難が生じることになる。したがって、表象の原因となる外界は、認識不可能なものとして存在していると考えしかない。

外界の原因 R についての判断は不可能であり、人間と人間以外の種が同じ表象をもちえないとすれば、両者が同一の判断を下すことはできないことになる。人間の知が制限を被るということ、人間が対象に関して判断を下す仕方は、人間の組織によって制約されているということは、トワルドウスキも認めている。しかし、そうであるにしても、人間と他の有機体の判断が異なっているかぎりには、真理の相対性が帰結することにはならないのである。人間によってなされた判断が真であれば、他の有機体はその判断を下すことがないとしても、この判断が偽になることはありえないからである。

トワルドウスキは、アリストテレス的な真理の対応説の立場をとるが、真理を外界との対応によって定義しようとはしない。それゆえ、外界が認識不可能であることは問題にならない。存在する対象であっても存在しない対象であっても、表象することは可能である。判断は、表象対象の存在を肯定もしくは否定するものである。トワルドウスキは、表象対象の存在がいかなる

場合に肯定されうるのかについては、何も語っていない。存在する表象対象について、その存在を肯定するのが、真なる判断であると主張しているにすぎない。存在するものについて存在を肯定することが真理であるという意味で、トワルドウスキの考え方は対応説であり、この意味における真理が相対的であることは不可能であるというのがトワルドウスキの主張なのである。

## 6. タルスキの真理論との関連

トワルドウスキの弟子であるウカシェヴィチ、レシニェフスキ、アイドゥキェーヴィチ、コタルビンスキなどがルヴフ-ワルシャワ学派の代表的指導者とされるが、アリストテレス主義の再興者といわれるブレンターノの影響は、トワルドウスキを介してこの学派にも及んでいる。ウカシェヴィチの「アリストテレスにおける矛盾律の原理 (Über den Satz von Widerspruch bei Aristoteles)」(1910年)は、この学派の論理学の発展に大きな影響を及ぼし、レシニェフスキは、フレーゲ以降の数理論理学とアリストテレス論理学の融和を試みている。彼らは、論理的反非合理主義に基づき、哲学的問題に対しても論理的手法を重視した。

1924年にワルシャワ大学で数学の学位を取得したタルスキは、ウカシェヴィチとレシニェフスキから論理学を、コタルビンスキから哲学を学んでおり、自身もルヴフ-ワルシャワ学派のメンバーの一人である。1939年にはナチスから逃れてアメリカに移住し、1942年にはカリフォルニア大学バークレー校に迎えられた。

タルスキの代表的著作である『形式言語における真理概念 (Der Wahrheitsbegriff in den formalisierten Sprachen)<sup>(5)</sup>』は、1931年にワルシャワ科学協会において、その内容がウカシェヴィチによって紹介され、1933年にポーランド語で出版、1936年にはドイツ語による改訂版が出版された。この著作は、分析哲学における真理論と意味論にきわめて大きな影響を及ぼしたことで知られている。

ここでは、このタルスキの真理論とトワルドウスキの真理論との関連について検討してゆくことにしたい。「タルスキが真理論におけるトワルドウスキ流の相対主義批判の影響を受けていたことは、疑う余地がない」(Wolenski, 1989, p. 175)といわれており、タルスキの真理論によって、逆にトワルドウスキの真理論の核心が見えてくると考えられるからである。

タルスキの『形式言語における真理概念』や「真理の意味論的観点と意味論の基礎 (The Semantic Conception of Truth and the Foundations of Semantics)」(1944年)の課題は、真理の概念の満足な定義、すなわち「実質的に適合しているかつ形式的に正確な定義」(Tarski, 1944, p. 341)を与えることであるとされている。第一に「実質的に適合している」というのは、真理についての古典的なアリストテレスの観念が、この定義によって正確に規定されているということである。すなわち「対応説」と呼ばれる真理論の内容が正確に定義されねばならないということである (Tarski, 1944, pp. 342-343)。これは、ブレンターノの影響を受けたルヴフ-ワルシャワ学派の伝統を受け継ぐものでもある。第二に「形式的に正確」とは、「その中で定義が与えられる言語の形式的構造が記述されねばならない」(Tarski, 1944, p. 341)ということである。これは、対応説にとって古典的な難問である「嘘つきのパラドクス」を回避するために必要となる条件である (Tarski, 1944, pp. 347-348)。

タルスキは、「真である」という述語が適用される候補として次の三種類が考えられるという。第一に「判断とか信念といった心理的現象」、第二に「何らかの物理的対象、すなわち言語的表現、とりわけ文」、第三に「『命題』と呼ばれる理念的存在者」。第三の「命題」については、長いあいだ多くの哲学者や論理学者の論議の対象とされてきたにもかかわらず、その意味が明確にも一義的にもなっていないという理由から退けられる。第一の「判断」は、特に理由は示されていないが、真理の担い手とは見なされない。これは、「命題」以上に、その意味するところが哲学者によって異なるためであろう。タルスキは、「真」という語は「文」に適用するのが最も「便利



(convenient)」であるという (Tarski, 1944, p. 342)。

しかし、日常言語の文は、真理の観念の満足な定義のための「形式的に正確」という第二の条件を満たしていない。言語の構造が明示されるためには、有意味と見なされるべき語と表現のクラスが一義的に特徴づけられねばならないし、表現のクラスのなかで「文」を区別するための基準が必要となる。そのうえで、その文がどのような条件の下で肯定されうかが定式化されねばならない (Tarski, 1944, pp. 346-347)。だが、日常言語は自然発生的であるため、任意の表現が文であるかどうかを完全に判定できるような基準を与えることは困難である。

さらに、「嘘つきのパラドクス」を回避するには、対象言語とメタ言語の区別という階層性が必要とされる。だが、日常言語においてこうした階層性を明確にすることは困難である。したがって日常言語における真理の定義はあきらめざるをえず、形式化された人工言語に対する真理の定義で満足せざるをえない。

真理の定義のための「実質的に適合」という第一の条件をタルスキは次のように定式化している (Tarski, 1944, pp. 343-345)。

(T) X が真であるのは、p のときまたそのときに限る。

p は任意の文であり、X はこの文の名前である。これは、「(T) の形の同値式」と呼ばれるが、「真」という語は、この (T) の形の同値式のすべてが肯定できるような仕方で用いられねばならない。真理の定義が「実質的に適合」しているといえるためには、その定義から、これらの同値式のすべてが帰結するのでなければならない。

定義それ自体と、定義が含意する同値式全体はメタ言語において定式化される。(T) における p は、対象言語の任意の文である。したがって、対象言語の文はすべてメタ言語に含まれるのでなければならない。あるいは、対象言語の文はすべてメタ言語に翻訳できるのでなければならない。

以上のようなタルスキの真理論をトワルドウスキの考え方と比較してみると、両者の間には根本的な違いがあることがわかる。

タルスキが真理の担い手を「文」としているのに対して、トワルドウスキは「判断」という心的なものと考えているのである。判断という心的作用と文そして理念的な命題との間には密接な関係がある。判断が真であるとか命題が真であるということもできるが、真であるとされる判断や命題の内容は文によってしか表現することができない。

トワルドウスキは、真偽は厳密な意味においては判断にのみ属するとするが、言明についても、言明によって表現される判断の真偽にしたがって、真であるとか偽であるとかいうことができるとしている (Twardowski, 1902, S. 446)。トワルドウスキの判断論において、判断そのものは心的作用であり、各人の判断作用はそれぞれ異なるものである。しかし、判断とは表象対象の存在を肯定もしくは否定することであるから、同一の表象対象について存在を肯定する判断は、同一の判断と見なすことができる。それゆえ、真偽が帰属させられるのは、個々の判断作用なのではない。同一の表象対象の存在を肯定する判断は、一つの判断として扱われるのでなければならない。判断の同一性は、実は、表象対象の同一性に由来するのである。同一の対象に対して存在を認めれば同じ判断であり、異なる表象対象に対して存在を承認すれば異なった判断ということになる。

判断の表現である文は、表象対象を表し、肯定文はその存在を認め、否定文は存在を認めない。先述のように、トワルドウスキは、表象対象に言語的表現を与えることに関しては楽観的な見方をとっていた。それゆえ、真偽は本来的には判断に属するが、その言語的な表現についても、判断の真偽に応じて真偽を帰属させることができるとする。しかし、日常言語によって判断の同一性を確保することは困難であり、パラドクスを回避することは不可能である。

したがって、トワルドウスキの理論を継承するためには、真理の担い手は、判断ではなく文であるとするのが「便利」であり、真理の定義には形式

化された言語が必要であることになる。タルスキは「物理的対象」としての文を、真理の担い手と見なすが、これは発音された音声記号の列や記された文字記号の列の集合のことであるとされる (Tarski, 1956, p. 156)。すなわち、個々の具体的な音の列や文字列ではなく、同一の文と見なされうる記号列の集合が真理の担い手ということになる。

文が真理の担い手であるとする、真理は言語に対して相対的であることになる。同一の音の列や文字列が、ある言語では文であり、他の言語では文ではないからであり、あるいは、同じ音の列が、二つの言語のいずれにおいても文ではあるが、一方では真なる文であり、他方では偽なる文であるという可能性も考えられるからである (山岡, 1996, p. 11)。

しかし、これによって相対的真理の存在が帰結することにはならない。ある記号列が、言語 A においては、指示語を含まない一義的な文  $S_1$  であり、言語 A を話す人々にとっては真であり、他方、同じ記号列が言語 B においては文  $S_2$  であり、言語 B を話す人々にとっては偽であり、さらに言語 C においては文ではないとしよう。この場合、同一の記号列が文であるか否か、そしてさらに、文である場合に真であるか否かが、言語に対して相対的であるように見える。だが、これは、ある物理的な記号列が文であるか否かが言語に対して相対的であるということであり、その記号列が、その言語の何らかの文の集合の要素であるか否かが、言語に対して相対的であるということにすぎない。その言語における当の文の真理は絶対的である。言語 A における文  $S_1$  の真理、言語 B における文  $S_2$  の非真理は絶対的なものである。文  $S_1$  が文  $S_2$  の正しい翻訳であることが確証されないかぎり、相対的真理の存在は帰結しない。それゆえ、タルスキのように文を真理の担い手としても、相対的真理を帰結することにはならないのである (Swoyer, 1982, pp. 90-94)。

タルスキの真理論は、「雪は白い」のような文がいかなる条件のもとで肯定できるのかを示すものではない。この文が肯定されるときには、それに対応する「文『雪は白い』は真である」もまた肯定されねばならないということを含意しているにすぎない。それゆえ、この理論はいかなる認識論的態度

からも中立的である (Tarski, 1944, p. 362)。タルスキの「対応説」は、文と実在との対応や、存在する事態との対応を真理の定義と見なすものではないのである。真理に対するこのような見方も、トワルドウスキの立場を継承するものと見なすことができよう。

トワルドウスキの理論では、存在する表象対象について、その存在を肯定するのが、真なる判断であるとされているにすぎない。たとえば、〈白い雪〉のような表象対象が存在するとき、その存在を肯定する判断は真であり、その判断は「雪は白い」といったかたちで言語的に表現される。「白い雪」と表現される対象が存在することは、「雪は白い」と表現される判断が真であることを含意する。これは、真理の担い手を判断とした定式であるが、これを文を担い手として定式化すれば、タルスキの定義が導かれることになる。

トワルドウスキの真理論は、心的作用を真理の担い手とするなど、一見すると、すでに過去のものであるかのような印象を受ける。だが、以上で見えてきたように、真理の担い手に関する見解を修正することで、トワルドウスキの基本的な考え方はタルスキの真理論のうちにほぼそのまま継承されていることがわかる。トワルドウスキの真理観は、現代真理論の系譜に直接むすびつくものなのであり、その独自の論点は、今日でもなお無視できないものであるといえよう。

#### 〔注〕

- (1) ルヴフは当時ポーランド領であったが、1939年にソ連によって併合され、1991年のソ連崩壊後は、ウクライナ共和国のリボフとなっている。ドイツ語名はレンベルク (Lemberg) である。
- (2) Łukasiewicz や Czeżowski も、真理をこのように定義している (Smith, 1989, p. 355)。
- (3) 1900年にポーランド語で出版されたこの論文は、1902年に M. Wartenberg によってドイツ語に翻訳され、*Archiv für systematische Philosophie* に掲載された。本稿での引用はドイツ語版による。
- (4) フッサールも、こうした種的相対主義を「人類主義」と呼び、同様の批判をおこなっている (Husserl, 1900, §36)。

- (5) 1933年にポーランド語で発表された後、1936年に独訳され (Tarski, 1936), 1956年にはウッジャーにより英訳された (Tarski, 1956). 本稿での引用は英訳による。

〔参考文献〕

- アリストテレス (出隆訳) 『形而上学』 (アリストテレス全集12巻) 岩波書店, 1968年.
- Husserl, E. (1900) *Logische Untersuchungen* Bd. I, Max Niemeyer Verlag, Tübingen.
- Husserl, E. (1913) *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Erstes Buch. in *Husserliana* Bd. III, 1950.
- Linsky, L., ed. (1952) *Semantics and the Philosophy of Language*, University of Illinois Press, Alabama.
- Łukasiewicz, J. (1910) “Über den Satz von Widerspruch bei Aristoteles”, in *Bulletin international de Académie des Sciences de Cracovie, Classe de Philosophie*, pp. 15-38, Eng. trans. by Weolin, V. *Review of Metaphysics* 24, pp. 485-509.
- Pearce, D. & Wolenski, J., eds. (1988) *Logischer Rationalismus. Philosophische Schriften der Lemberg-Warschauer Schule*, Athenäum Verlag, Frankfurt am Main.
- Russell, B. (1903) *The Principles of Mathematics*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Russell, B. (1904) “Meinong’s Theory of Complexes and Assumptions”, in *Mind* 13, pp. 204-219, pp. 336-354, pp. 509-524.
- Russell, B. (1905) “On Denoting”, in *Mind* 14, pp. 479-493. 清水義夫訳「指示について」『現代哲学基本論文集 I』勁草書房, 1986年.
- Smith, B. (1989) “Kasimir Twardowski: An Essay on the Borderlines of Ontology, Psychology and Logic”, in Szaniawski, K., ed., *The Vienna Circle and the Lvov-Wrsaw School*, Kluwer Academic Pub., Dordrecht.
- Swoyer, C. (1982) “True For”, in Meiland, J. & Krausz, M., eds., *Relativism: Cognitive and Moral*, University of Notre Dame Press, London, pp. 84-108. 戸田省二郎訳「……にとっての真」『相対主義の可能性』産業図書, 1989年.
- Tarski, A. (1933) *Pojęcie prawdy w językach nauk deducyjnych*, Towarzystwo Naukowe Warszawskie, Warszawa, Ger. trans. in Tarski (1935).

- Tarski, A. (1935) “Der Wahrheitsbegriff in den formalisierten Sprachen”, *Studia Philosophica* 1, pp. 261-405 ; Ger. trans. by Blaustein, L., Eng. trans. by Woodger, J. H. in Tarski (1956).
- Tarski, A. (1944) “The Semantic Conception of Truth and the Foundations of Semantics”, in *Philosophy and Phenomenological Research* 4, pp. 341-375, repr. in Linsky (1952). 飯田隆訳「真理の意味論的観点と意味論の基礎」『現代哲学基本論文集II』勁草書房, 1987年.
- Tarski, A. (1956) *Logic, Semantics, Mathematics*, Clarendon Press, Oxford.
- Twardowski, K. (1891) *Idee und Perzeption. Eine erkenntnistheoretische Studie aus Descartes*, W. Konegen, Wien.
- Twardowski, K. (1894) *Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen. Eine psychologische Untersuchung*, W. Hölder, Wien, Nachdr. d. 1. Aufl. mit einer Einleitung von Haller, R., 1982, Philosophia Verlag, München.
- Twardowski, K. (1902) “Über sogenannte relative Wahrheiten”, in *Archiv für systematische Philosophie* 8, pp. 415-447 ; Ger. trans. by Wartenberg, M., repr. in Pearce & Wolenski (1988).
- Wittgenstein, L. (1922) *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kegan Paul, London. 奥正博訳『論理哲学論考』（ウィトゲンシュタイン全集1）大修館書店, 1975年.
- Wolenski, J. (1989) *Logic and Philosophy in the Lvov-Warsaw School*, Kluwer Academic Pub., Dordrecht.
- 山岡謁郎 (1996)『現代真理論の系譜』海鳴社.



# THE BULLETIN OF CHUO-GAKUIN UNIVERSITY —MAN & NATURE—

June

2006

No.23

---

## CONTENTS

### ARTICLES

- Relationship between Isokinetic Muscular Strength and running  
Performance in the Long-Distance Runners .....Yuji KAWASAKI ... 3
- Twardowski's criticism of relativism .....Hideaki SATO ... 17

### TRANSLATION

- “Les Juifs, le monde et l'argent” .....Masaaki SUZUKI ... 41

### NOTE

- The Organic Structure and Element of Coaching Development Program  
— A Case Curriculum of IAAF Coaches Education and  
Certification System —  
.....Hirokazu KOBAYASHI ... 83  
Nan SUN

### ARTICLE

- A study of Stone Inscriptions reflecting Northern Wei Style 北魏体 :  
With the Focus on “*Longmen sipin* 龍門四品”  
.....Masamune NAKATA... (1)
- 

THE FACULTY OF COMMERCE  
THE FACULTY OF LAW  
CHUO-GAKUIN UNIVERSITY  
ABIKO, CHIBA, JAPAN